



大洲高校PTA月報

平成29年11月号

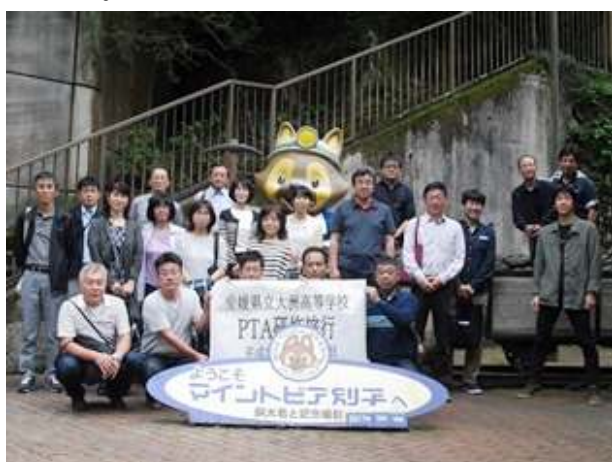
会員寄稿

PTA研修旅行報告

PTA副会長 篠崎 守良

降ったりやんだり、あいにくの曇り空となってしまいましたが、紅葉が美しい季節を迎えつつある石鎚の連山を遠くに仰ぎながら、初めての研修旅行に参加してまいりました。今年、地元愛媛の近代史跡である「別子銅山」を満喫する研修旅行。バスの中では、初めに自己紹介が行われ、参加している先生や保護者の日常の出来事や、子供とのふれあいのエピソードなどを聞かせて頂き、楽しく和やかな時間を過ごす事ができました。

最初の研修地「別子銅山記念館」へは10時ごろ到着。この記念館は、東は「大山積神社」の神域、西は生子橋を挟んで東予の名社「内宮神社」、南は生子山の西隅（通称煙突山）、北は山根公園を直下に、更に新居浜市の工業群と町並みを一望できる景勝の地にあります。記念館の中では、常勤スタッフの方が、展示物の説明をしながらか先導して下さいました。「別子銅山」という名称・地名は有名ですが、その歴史や銅山の全体像については、たいした知識を持ってなかった事もあり、とても興味深い時間を過ごさせて頂きました。別子銅山の歴史は、元禄3年（1690年）人跡未踏の銅山峰（海拔1291メートル）の南側で露頭が発見され、翌4年（1691）から住友によって採掘が開始されたのが始まりだそうです。海拔1200メートルの地帯から斜めに深く長く帯状に貫入した鉱床は、世界的にもまれにみる大鉱床であり、開坑以来、江戸・明治・大正・昭和の4時代282年にわたる長い間、終始住友によって営々と掘り続けられたそうです。また、昭和48年（1973）採掘地域が海面下約1000メートルの地中深部に達するに及んで、地圧や地熱の上昇が著しくなったために閉山する事となってしまいましたが、これが住友連携諸事業の礎となって、その発展に大きな使命を果し、また四国随一の工業都市新居浜市の生成発展に大きく貢献したとの事。愛媛は東予の工業群の、まさに礎となった土地とそこで働いた人たちの事を思いながら、記念館を後にしました。



次の研修地は「マイントピア別子／銅山観光」。端出場ゾーンと呼ばれる場所で、銅山のテーマパークとなっており、延長333mの観光坑道で、子供が遊びながら体験できるような工夫が随所にあるリアルな施設を体験しました。また、この施設内で昼食を取り、お土産物店でしばしのお買い物を楽しみました。かわいい鉱山鉄道が記憶に残りました。

最後の研修地は「東平ゾーン／東洋のマチュピチュ」。西日本一の高さを誇り「四国の屋根」と称される石鎚山系の東端、赤石山系。その一つ、標高1294メートルの銅山越（新居浜市）の周辺は、登るにつれて時を遡ること

ができる空間で、深い山の奥にたたずむ威容は、南米ペルーの山中にあるインカ帝国の遺跡になぞらえて「東洋のマチュピチュ」と呼ばれているそうです。貯鉱庫跡など、さまざまな遺構を巡り、別子銅山、新居浜を後にしました。

最後に、総務委員会や世話役をして頂いた稲積先生・土居先生のお陰で、たいへん有意義な研修旅行となりました。先生方や会員同士の交流もでき、とても嬉しく思っております。来年もまた、多くの会員の皆様に参加して頂き、この感動を分かち合いたいと感じました。